

首都と地方社会

— 古代アンデス諸国家における在地性について —

渡部 森哉 *

中央アンデス地帯では、前 3000 年頃から神殿建設が始まった。神殿建設と神殿の更新は約 3000 年間続き、その後、後 1 世紀頃にアンデスの初期国家モチェが成立した。先スペイン期最終期に台頭したインカ帝国においては、地方統治のために地方行政センターが各地に設置された。行政センターは、首都クスコと共通する特徴を有するが、同時に各遺跡の独自性も目立つ。

本論文では、インカ帝国とワリ帝国を事例として、地方にローカル性がどのように現れるかを考察する。中央からの一方向的な支配を否定し、地方社会の主体性を認める研究者は、地方独自の、つまりローカルな特徴に目を向けがちである。しかし地方に現れるローカル性には、中央が意図的に残した、あるいは造り上げた結果という場合もある。ローカル性は関係性を捉える概念であり、中央と地方を対立的にのみ捉えるべきではない。

KeyWords

首都
地方支配
インカ
ワリ
土器

目次

- I はじめに
- II ローカルとは何か
- III インカ帝国の首都
 - 1. クスコ
 - 2. 中央の拡大
- IV アンデスにおける人と場、境界
- V インカ帝国の民族集団
- VI ローカル性のレベル
- VII ワリ帝国
- VIII おわりに

I はじめに

南米大陸西部のアンデス地方はアメリカ大陸最古の古代文明が興った場所として知られる。神殿を中心とした社会は紀元前 3000 年頃から約 3000 年間続いたが、その間に王が統治する国家と認定できる社会は成立しなかった。この神殿を中心として社会がまとまっていた社会の時代を形成期（前 3000-50 年）と呼ぶ。形成期の間に、神殿は場所を変えつつも建設され、更新が続けられた（渡部 2019）。

アンデスにおける初期国家が成立したのは、紀元後 1 世紀頃とされる。アンデスの初期国家と認定されるのは、ペルー北海岸に発展したモチェと呼ばれる社会である。その後、海岸地帯、あるいは山間盆地を中心としたいくつかの国が盛衰を繰り返した。先スペイン期最後にインカ帝国が台頭したが、1533 年にはフランシスコ・ピサロ率いるスペイン人一向が首都クスコに入城し、滅亡したとされる。

本論文は、紀元後 1 世紀から 16 世紀まで発展した古代アンデスの諸国家のうちインカとワリの 2 つを事例として、国家社会における中央（首都）と地方の関係に着目し、アンデスの国家社会における地方のローカル性の特徴を考察することを目的とする。ローカルを局所的な特徴とすれば、理論上は首都など中央の特徴に関してもローカルな場合がある。ただし、アンデス研究ではこれまでローカルという概念は、首都ではない地方の特徴を説明するのに主に使われてきた。本論文では、地方に現れるローカル性に焦点を当て、それと中央との関係を考察する。国家社会を対象とする場合、中央の特徴と違うものが認められると、ローカルといってしまう傾向があり、ローカル性を厳密に議論してきたわけではない。本論文は、考古学における先行研究を踏まえ、アンデスの特徴の検討から、ローカル性の議論をいくつかのレベルに分けて整理し、改善することを目的とする。

アンデスで国家社会と認定されるのは、新しい方から、インカ（後 15-16 世紀）、チムー（後 14-15 世紀）、シカン（後 11-13 世紀）、ワリ（後 8-10 世紀）、ティワナク（後 8-11 世紀）、そしてモチェ（後 1-8 世紀）の 6 つの社会である。それ以外の社会については国家であるかどうかについて意見の一致を見ない。例えば形成期に建設された神殿を中心とした社会を国家と見なす研究者もいるが、多くの研究者は形成期の神殿社会を国家とは認定していない（渡部 2019）。

以下でははじめに、アンデスにおけるローカル性を論じるための基本的な情報についてまとめ、その後、具体例を論じる。取り上げるのは、アンデス文明の集大成として見なされるインカ帝国（図1）、およびその祖型と見なされるワリ帝国（図2）である。まずインカ帝国の首都クスコと地方との関係に着目し、アンデスにおける人間と場所の関係について論じる。そして地方に現れるローカル性の特徴を考察するため、インカ帝国の支配下の民族集団に着目する。その後、ローカルと呼ばれる現象には様々なレベルがあり、それらを類型化する必要性を論じる。次にワリ帝国の事例を扱うが、そのためにインカ帝国を参照枠として、それと対照させながら、中央と地方の関係性を論じる。インカとワリに共通の特徴を抽出すると同時に、各国家の個別的なローカル性の特徴について論じる。

II ローカルとは何か

まずローカルという概念について考えてみたい。文化人類学や哲学においては在来知、ローカル・ノレッジという概念に関する先行研究がある（ギアツ 1991[1983]; 藤垣 2008; 中空 2019）。そうした研究においては、近代的な科学知と対立するものとして、説明され、科学知にもローカル性が認められるという指摘がされている。

文化人類学などでは、ローカルはグローバルと対比され用いられる概念であり、グローバリゼーションとローカリゼーション（ローカライゼーション）が図式的に用いられる。しかし、考古学ではグローバルという概念が用いられること自体が少ないため、ローカル性がグローバル性と対比的に論じられることはあまりなかった。ローカルという考え方が用いられるのは、主に中央と地方の関係性の記述においてである。そうした中、考古学者ジャスティン・ジェニングス（Jennings 2011）は、文明やホライズン（後述）という概念の代替案としてグローバリゼーションという概念の導入を提案した¹。つまりローカル性と対比させるための概念としてではなく、広範囲に共通の文化要素が広まる現象を説明する概念として、考古学における新たな選択肢として示した。グローバリゼーションの事例として西アジアのウルク、北米のカホキア、アンデスのワリが取り上げ

* 南山大学

1 また、同様に世界システム論も 1980 年代から考古学に応用されている（Chase-Dann & Hall 1997）。

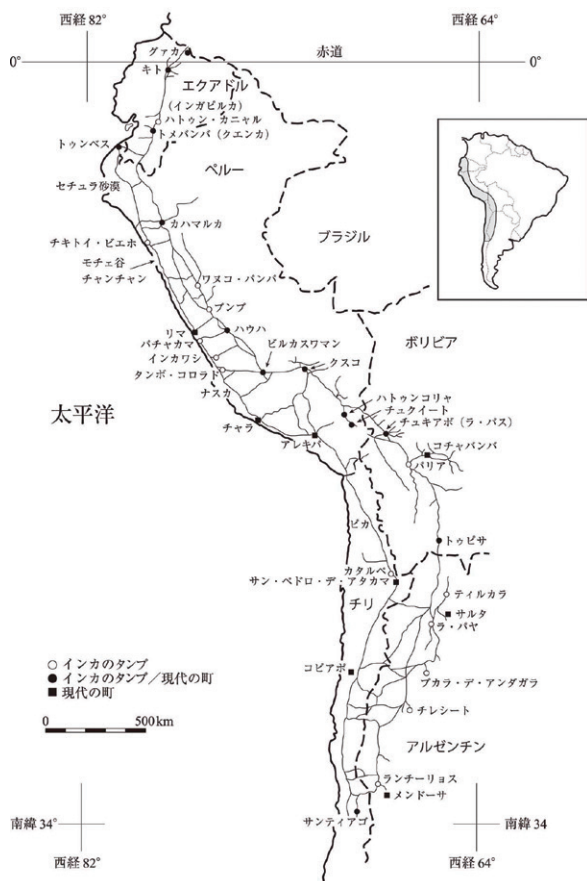


図1 インカ帝国の行政センターとインカ道
(渡部 2010)

られている。

これまでインカ研究、ワリ研究では、グローバルとローカルを対比させる議論に平行するように、中央の介在を認め一枚岩的に国の特徴を論じるか、あるいは地方の主体性、エージェンシーを認めローカルな特徴を強調する議論か、そのどちらかにぶれる傾向が強かった(Jennings [ed.] 2010; Malpass [ed.] 1993; Malpass & Alconini [eds.] 2010)。グローバルゼーションという考え方には、特定の中心が想定されない場合も、グローバルな現象を直接的、間接的に中心・中央と結びつける場合もある(Jennings 2010, 2011)。本論文は後者を扱うが、中央による統治と在地の動きを対比的に論じる従来の考古学の議論の延長上に位置づけられる。

考古学では大規模な遺跡をセンターと呼び、その性格によって例えば祭祀センター、行政センター、などと呼称する。あるセンターに存在する特徴が地理的に離れた他のセンターにも認められる場合、それは広範囲に認められる証拠とされローカルな特徴とはみなされず、逆に単独あるいは近接した諸センターに分布が限定されればローカルな特徴と認定される。広範囲に同一の文化要素が認められる場合として、インカやワリのように1つの巨大な中央(首都)から要素が広がる場合もあるし、形成期のように対象範囲内に大規模遺跡(神



図2 ワリ帝国の関連遺跡

殿)が複数含まれる場合もある。

国家などの大規模社会では、中心である首都に存在する特徴が基準とされる。地方において中央の特徴が見つければ、それはローカルな特徴とは見なされない。ローカルは、在地的、土着的、局地的、などと訳されるが、要するに地方にはあるが、中心とは異なる特徴を説明するのに用いられる、相違点に着目した概念である。従って、中央の特徴を把握しなければ、ローカルの特徴を説明することはできない。ただし、局地的な現象としてローカルを捉えれば、首都についてもローカルと表現することもできる。中央の特徴が地方に認められない、広まっていないという場合もあり、それを中央のローカル性と説明することもできる。例えばインカ帝国の首都クスコにしか見られない場合は、クスコのローカルな特徴となる。

本論で扱うのは地方におけるローカル性であるが、それは中央の特徴のローカル性を論じることにも繋がる。つまり中央の要素がない、薄い場合がローカルな現象とされるが、逆に中央に着目する場合、それが地方に認められなければ、中央のローカルな現象となる。またローカルといった場合、遺跡ごとではなく、ある程度の地理的範囲を対象とする。単独の遺跡、単独の墓にのみ認められる特徴がローカルと認定されることはない。

ローカル性と対置されるのは、同一の特徴が広範囲に広がる現象である。アメリカ大陸の考古学ではホライズンという

概念が用いられるが、それは主に国家などの大規模社会の拡張、あるいは形成期の神殿のネットワークにより共通の特徴が短期間に広まったことを示す概念である(本号の松本論文参照)。アメリカ合衆国の考古学者ジョン・H・ロウはチャビン、ワリ、インカの3つの時期をホライズン期と設定し、それらの間の時期を「中間期」とする編年を提唱した(Rowe 1962; Rowe & Menzel [eds.] 1967)。大まかな年代は次のようであった²。

現在ではこの編年が、年代を修正しつつ、アメリカ合衆国のアンデス考古学者の間で一般的に使用されている。3つのホライズン以外にもネガティブ・ホライズン、赤地白彩ホライズンなど同一の特徴の土器が広まる現象を説明す

	Rowe 1962	現在主に用いられる年代
後期ホライズン	後 1450-1532 年	後 1450-1532 年
後期中間期	後 900-1450 年	後 1000-1450 年
中期ホライズン	後 550-900 年	後 600-1000 年
前期中間期	前 400- 後 550 年	前 400- 後 600 年
前期ホライズン	前 1400-400 年	前 800-400 年
草創期	前 2100-1400 年	前 1500-800 年
先土器時代	前 2100 年以前	前 1500 年以前

るのにもホライズン概念は使用された(ウィリー & サプロフ 1979[1974]: 264)。ホライズン概念は同時代性に着目した概念であり、理想的には同一の特徴が時期差を伴って広まる場合には使用されないが、実際には短期間と言っても数十年、あるいは100年以上の時間幅を指して用いられている。一方「中間期」は、地方的な、つまりローカルな特徴が強い時代と言える。そして、広範囲に同一様式が広まり社会間関係が拡張する時期と、内向的な発達の時代が交互に現れるパターンがアンデスの特徴として強調される³(Willey 1991)。

本論文で扱うインカ帝国は後期ホライズン期に、ワリ帝国は中期ホライズン期に台頭した(前期ホライズンについては本号の松本論文を参照)。ホライズンの中にもローカル性があり、共通性に重きを置くか、あるいは個別性に着目するかで、その時代の見方は異なる。各ホライズンにおける中心は明確であり、インカにおいては首都クスコ、ワリ帝国においては首都ワリ遺跡の特徴が基準とされる。そして首都と比較した際

に、それとの違いに応じてローカル性が定義され、説明される。ローカル性が中心との比較で説明される以上、まずアンデスにおける中心性とは何かを考察し、その後、ローカル性を考えるという手順で議論するのが建設的であろう。

地球規模で人、物、情報が行き交う現代社会におけるローカル性を考えることと、古代国家におけるローカル性を分析することは規模、性格が異なる。現代社会を対象とする場合、グローバリゼーションの逆の動きとしてローカルな現象の強化を捉えることもできるが、本論文で扱うのはあくまで古代社会、それも国家社会内のローカル性であり、中心との関係に着目し、静態的な分析を行う。古代社会におけるローカル化の動き自体を論じる通時的分析は次のステップの課題となろう⁴。近代世界システムというモデルで説明されたのは(ウォーラーステイン 1981[1974])、その原動力となる中心が1つ、あるいは複数ある場合である。ローカル性を中央との関係で考えるか、グローバル現象との関係で捉えるかは、排他的な関係ではない。

インカ研究やワリ研究では、帝国を一枚岩のものとして捉える傾向が強かったが、1990年代から各地の多様性を認めるという研究が目立つようになってきた(Jennings 2006a, 2006b; Lau 2005; Malpass [ed.] 1993)。その場合に用いられる概念が、エージェンシー、在地性(ローカル性)などである。中央と地方の間には不均衡な関係が想定され、ローカルな現象を、中央への反発、対応として捉えられる場合が多い。また中央と地方と言っても、地方に同じように中央との関係を示す証拠が現れることはなく、中央との距離などに連動しグラデーションを伴った関係となる(Stein 1998)。そのため在地性が強く現れるのは、地方に首都に匹敵するだけの力がある場合というわけではない。中央からの距離の他、地方それぞれの状況から、首都との関係を考える必要がある。

ではまずインカ帝国のクスコの例を見てみよう。その際、ローカルの特徴の1つである場所の意味についても考える。もちろん対象となる人々の立ち位置と場所を捉えれば、それは空間に固定されていない場合もあろう。ただし、今回扱う対象は特定の場所に位置している遺跡であるため、空間的に固定されている事例のローカル性について考える。

2 バルや日本のアンデス研究者は別の編年を用いる。古期(前 5000-3000 年)、形成期(前 3000-50 年)、地方発展期(前 50- 後 600 年)、ワリ帝国期(後 600-1000 年)、地方王国期(後 1000-1450 年)、インカ帝国期(後 1450-1532 年)、という編年である。

3 メソアメリカでも外交的な動きと内向的な動きを対置するデュアル・プロセス理論と呼ばれる議論がある(Blanton et al. 1996)。

4 「振り子モデル」に関しては渡部 2010 を参照。

Ⅲ インカ帝国の首都

1. クスコ

そもそも首都という概念は西洋的な概念である。スペイン語で首都を表す Capital という単語をスペイン語=ケチュア語の辞書で引いても出てこない。街を意味するスペイン語 ciudad は、カパックリヤクタ (Kapakllakta) と訳されている (González Holguín 1989[1608]: 470)。カパック (Kapak) とリヤクタ (llacta) が一緒になっている。カパック (Kapak, capac) はインカの王族の称号である。キャサリン・ジュリアンは、インカにおけるカパックはヨーロッパの王という役割よりも重要であったと考えている (Julien 2000)。インカ族の中でも限られた人物がカパックと呼ばれたのである。リヤクタ (llacta) は「pueblo 村」と訳される (González Holguín 1989[1608]: 207)。カパックは王族を示すため、まず Kapakllacta (ciudad) は人にまつわる概念であると理解できる。それは、非常に政治的理由によって建設された東アジア的な都市と類似している部分である (藤本 2007)。また、カパックと「家、建物」を意味する「ワシ huasi」が一緒になった単語 Kapac huaci を引くと、「Cassa rreal grande (王族の大きな館)」と説明されている (González Holguín 1989[1608]: 135)。やはり建物そのものではなく、人に関連するという特徴がある。

以上を踏まえるとインカ帝国における町は、ある意味で人間的な概念であると言える。アンデス史研究者スーザン・ラミーレスは、インカ帝国を中世ヨーロッパの「イティネラリー・コート (移動する王宮; Itinerary court)」をモデルとして解釈する (Ramírez 2005)。それは、インカ王ワスカが「クスコ」、同じくインカ王ワイナ・カパックが「老クスコ」と呼ばれたことから推定した解釈である。つまりクスコとは役職を示す単語であり、その人物がいる場所がインカ帝国の首都クスコの名称にもなっているという。しかし、別稿で論じたように (渡部 2007)、クスコは「フクロウが留まった岩 cuzco guanca」の略であり (Cerrón-Palomino 2005: 12)、場所に密着した概念である。クスコという場所を統治する王のこともクスコと呼んだと解釈の方が整合的である。「街 (Ciudad)」に対応するケチュア語カパック・リヤクタは、カパックという重要な身分と結びついた概念であるが、場所が先にあり、それが特定の人に結びついたと考えられる。クスコをはじめとするアンデスのリヤクタは、一義的に人間中心の概念ではなく、場所を示す、さ

らに言うならば、後述するようにワカという聖なるものと関連した概念と言えよう。

場所が人と結びついた性格を有するため、ローカル性は場所の違いだけではなく、人の違いを示すと想定できる。しかしアンデスのセンターの位置は、中国の王朝の首都や日本の都のように (藤本 2007)、政治的要因によって、支配者によって一義的に決められるわけではない。考えなければならないのはワカを中心とした信仰についてである。マコフスキも西洋の都市が人間中心の都市であるのに対し、アンデスの都市はコスモロジーを中心としていると論じている (マコフスキ 2012)。

2. 中央の拡大

考古学における国家の判定基準の1つとして、4段階にわたる階層性が挙げられる (Isbell & Schreiber 1978; Wright & Jonson 1975)。アンデスの国家の場合、第1レベルと第2レベルの間の差が大きく、さらに中央が拡大を続けるという特徴がある。さらに、インカの場合、中央のクスコの特徴を地方に移植するという方策がとられたようである。それは「別のクスコ」と呼ばれる場所のことである (渡部 2014)。

クスコは本来場所を意味する名称であったが、人を表すのにも使用された。日本でも出身地で人間を表すことはあるが、それと類似している。そしてインカの場合、首都クスコが基準となり、地方に「別のクスコ (もう1つのクスコ)」と呼ばれる場所が造られた。それは理念的にクスコをコピーしたものと想定されるが、その規模は首都に比べて小さい。史料から確認できる別のクスコは、北からキト、トメバンバ、ワヌコ・バンバ、ハトゥンコリヤ、チャルカス、の5つである (Guaman Poma 1987[ca.1615]: 185[187])。さらにペルー南海岸のカニエテ川に「新しいクスコ」が設置されたとされ (シエサ・デ・レオン 2006[1553]: 321, 2007: 401)、それは現在のインカワシ遺跡と同定されている (図1)。

「別のクスコ」「新しいクスコ」はケチュア語でタンブと呼ばれる一連の遺跡の中に含まれる。タンブとは考古学で行政センターと呼ばれる遺跡で、インカ道の途中に配置された。逆に説明をすれば、タンブを繋いでインカ道が走っている。そしてそこは人が恒常的に住むような場所ではなかった。譬えて説明すればイベント会場と倉庫と会社と一緒にあったような機能を備えた場であった。従って、それらは首都クスコの機能の一部を切り取って造られたものであり、理念的には「別のクスコ」「新しいクスコ」は首都の一部を写し取った場と言えるだろう。首都が単独で存在したのではなく、複数に分かれ互いに繋がれるように網目状に存在したと比喩的に説明も

できよう。クスコを1枚の織物に譬えれば、行政センターは編み目の中の糸と糸が交差する点に位置するのである。

行政センターは在地の人々が主体となって建設した場ではなく、帝国(中央)の統治のために設置された場である。この解釈を支持する状況証拠として、これらの遺跡がインカ帝国征服後に全て放棄されたということが挙げられる。行政センターの動きは中央の動きと直結しており、それと連動する。そしてこうした網のような構造が首都の特徴とすれば、網で掬って(網を取り外して)残った部分が在地のものであると言える。

インカ帝国のクスコのように、中央、首都が拡大し続けること、かつ首都とその次のレベルの遺跡間格差が大きいという点はアンデスの国家の特徴である。クスコが人を指すとしても、そして別のクスコが複数あるとしても、首都クスコがどこかであるかは、その規模と荘厳さから明らかである。こうした中央が拡大し続け、首都が際立って大きいという特徴はアンデスの他の国家にも共通する。そしてその始まりはアンデス形成期まで遡る。形成期の神殿社会の例では、神殿が巨大化する一方で、それらを支えた人々の集落、住居があまりはつきりしないという特徴がある(渡部 2019)。

行政センターの建設はむしろ中央の特徴を表すとすれば、地方のローカル性とはどこに現れるのであろうか。まず諸行政センター間で異なる建築の特徴、土器の特徴に認められる。そしてもっと直接的には、地方のローカル性は行政センターの外側、道路から離れたところに位置する遺跡などに認められる。行政センターの外側にはほとんどインカ文化の要素が認められない場合もあり、例えばペルー北部高地カハマルカ地方では、行政センターとインカ道を除けば、インカ文化の遺構や遺物をほとんど見つけることはできない。複数のチームが遺跡分布調査を広範囲に行ったが、インカ様式土器が分布する遺跡は極めて少ない⁵(Julien 1988; Reichlen & Reichlen 1949; Seki *et al.* 2001, 2002, 2003)。後期ホライズンに対応するインカ期の証拠であれば、広範囲に広まったのであるから、同定が容易であるかというところではなく、むしろ状況は逆である。インカ帝国の地方では、まずインカ期の遺跡であるかどうかの判定が難しい。ホライズン期にはインカ文化やワリ文化の証拠は特定の点に

集中するため、そこを外すと見つけることは困難である⁶。そしてインカ期のコンテキストでインカ様式ではないものが現れると、ローカルな特徴と認定される。カハマルカ地方を事例とすれば、インカ期にも製作が続けられたアモシュルカ・コンプレックス(Amoshulca Complex)の土器製作がその例である(渡部 2010)。

以上を踏まえた上で、次節で、アンデスにおける空間と人間の関係を整理する。アンデスにおける場の意味を考えたい。

IV アンデスにおける人と場、境界

まずリヤクタの意味を掘り下げて考えてみたい。街(カパック・リヤクタ)を構成するリヤクタとは、ワカとそれを奉じる人々、という意味である(Salomon 1991: 23)。ワカとは、アンデスで信仰の対象となる物体の総称である(Bray [ed.] 2015; Meddens *et al.* [eds.] 2014)。一義的には自然の中にある聖なる物体のことをであるが、そこから敷衍して、移動可能な聖なる物体、遺跡、ミイラなどもワカと呼ばれる。ワカは自然の地形であるが、例えば岩、川の合流点などがワカと認識される。インカ帝国の首都クスコもワタナイ川(サブヒ川)とトゥリュマヨ川の合流点に建設された。また各共同体は、祖先が出てきたと信じる特定のワカを有していた。そうした共同体の始原の場であるワカをパカリナと呼んだ(アリアーガ 1984[1602]: 401)。パカリナは共同体の中心、起源の地であり、その場所が移動することは想定されない。このように人間が場所に結びついている。

先スペイン期最後のインカ帝国の時代になっても、我々が現在使用するような面積情報を伴う地図(topographical map)は使用されなかった。つまり空間が面的に認識され、広さを持ち、境界線で区切られるとは考えられなかった。どのように認識されていたかという、トポロジカル・マップ(topological map)、つまり点の連続性として認識された

5 レシュレンらはカハマルカ、バーニョス・デル・インカ、パソ・デ・シャウリュ、ヤモバンバ、タンボ・デ・オトゥスコの5つをインカ文化の遺跡としてあげているが(Reichlen & Reichlen 1949)、タンボ・デ・オトゥスコはワリ期の遺跡であり現在エル・バラシオと呼ばれている。またヤモバンバもワリ期と考えられていた(Watanabe 2002)。インカ期の遺物が確認できたのはジュリアンの調査では115遺跡中3遺跡(Julien 1988: 115, 168)、関らによる調査でも247遺跡中4遺跡のみである(Seki *et al.* 2001, 2002, 2003)。

6 ただし調査の進展に伴いインカ期のより多くの指標、証拠が見つかりつつある(Malpass & Alconini [eds.] 2010)。

(渡部 2007: 106)。ある地点と別の地点の2点間関係が連続的に繋がっていく空間認識である。現代でいえば、鉄道の路線図が例としてあげられる。そしてインカの場合、紐を用いた記録道具キープを用いて、紐の結び目と空間認識を対応させていた可能性もある。

アンデスにおいても面的な空間認識があったと考える研究者もいる。しかし、それは線で区切られる空間ではなく、点の密度が濃くなることで結果的に面に近い状態として認識されると考えた方が適切である。確かにアンデスにはスペイン語でモホンと呼ばれる、境界の石としてしばしば説明される物体があった。しかし、モホンは境界そのものではなく、モニュメントのような物体として考えた方がより適切である(Crickmay 2006: 73; Kumai 2002; 渡部 2007)。対応するケチュア語は、サイワ(sayhua)である。史料を読み解くと、モホン/サイワの一部はワカと同様の特徴を有しており、境界というよりも1つの基準点を示している。つまり境界ではなくむしろ中心性を示している。

こうした点の集合による空間認識を典型的に示しているのが、首都クスコのセケ体系である(Bauer 1998; Cobo 1964[1653]; Zuidema 1964)。クスコの中心である太陽の神殿から延びる想像上の放射線がセケであり、セケは周囲に分布するワカを結んだ線であった。クスコの空間認識の枠組は、ワカとセケを基準としていた。イエズス会士ベルナベ・コボの記録文書(Cobo 1964[1653])の中に写されたセケ・リストには328のワカが登録されているが、そのうち96(29%)が泉で、95(29%)が石であった(Bauer 2018: 490; Christie 2018: 498)。それらに続き、丘や峠が28(9%)、建物が28(9%)、畑や平原が28(9%)、墓が10(3%)、溪谷が7(2%)、などがあった。道も2(1%)ある。

クスコの空間は面的にはなく、点の集合として認識された。そして中心となるコリカンチャ(黄金の囲い)あるいは太陽の神殿と呼ばれる建物から一番遠いワカがそれぞれのセケ上にあった。しかしながら、一番遠いワカをそれぞれ結んで線を引くという空間認識はなかった。さらにそれぞれのセケ上にあるワカの管轄、所属は明示されているが、セケとセケの間には帰属が明示されない空間があった。

インカ帝国はケチュア語で、タワンティンスユと呼ばれ、それは「4つのスユが一緒になった」、を意味した。インカ帝国はチンチャイスユ、アンティスユ、コリヤスユ、クンティスユの4つから成り、クスコ内部も4つのスユに分かれていた

(Pärssinen 1992; 渡部 2010)。セケは4つのスユのいずれかに属し、セケとセケの間の空間は両側のセケと同じいずれかのスユに属していたと考えることはできる。スユとは「部分」を意味し(González Holguín 1989[1609]: 333; Santo Tomás 1951[1560]: 353)、ワカ、セケ、人間集団がいずれかのスユに属した。空間が線によって4つに分けられるということではない。

次に空間概念をより掘り下げて考えるため、土地の概念を取り上げたい。アンデスにおいては土地の所有権というものはなく、あるのは用益権であった(Ramírez 1996)。土地はワカのある場、あるいはワカそのものであるから、それを人間が所有するということは、あり得なかったのである。人間はあくまでそこを使用し、労働力を投下して栽培した作物や飼育した家畜を所有するのみであった。そして誰も使用していない土地は、他の集団が使用することができた。これはジョン・ムラが垂直列島というモデルを提示した時に示したポイントの1つと関係する(Murra 1972)。

アンデスでは高度差によってめまぐるしく環境が変化するため、同一集団が複数の環境帯を多角的に利用することができた。そのため異なる環境帯に生活する集団間での物々交換は発達しなかった。アンデスでは生活必需品に関しては、交易に頼らなかった。そのため貨幣も生み出されることはなく、市場や商人も存在しなかった。つまりアンデスの人々は基本的に自給自足経済を志向した⁷。その1つの表れが垂直列島という飛び地の形態である。それは例えば中核となる高地から、おなじ集団の一部を遠隔地に送りこみ、高地という環境では栽培、獲得できない物資を入手するという方法である。人々を送り込む先の遠隔地は、中央部とは不連続の飛び地という形態をとり、そこでは複数の集団が共存する。飛び地では複数の集団が隣接することになり、複数の中央のものと同様に推定される特徴が認められることになり、モザイク状の人間集団の分布が想定できる。アンデスのローカル性を論じる際には、この点を留意する必要がある。つまり、ある一定面積の地域ごとに人々がまとまり、そこに固定されて、つまり長期間にわたって生活していたわけではない。飛び地は中央と結びついた、あるいは中央の一部と見なされ、異なる集団の飛び地が1つの地域内に併存する。そのため、ある範囲内には複数の集団が共存するのである。「別のクスコ」もこの垂直列島の飛び地と類似した原理に従っている。

仮に地方に生活する人々が、土着の人々と認定できるぐら

7 ただし黒曜石やスポンディルス貝など遠隔地から運び込まれた物資も存在する。儀礼に関わる物資が広範囲に分布するという一般的な傾向が認められるが、それがどのようなメカニズムによるかは明らかになっていない。

い、ある程度の期間にわたって同じ場所にいたのであれば、中央と地方の区分はしやすいであろう。ところが、インカ帝国の場合、人間集団を頻繁に移動させた。そのため、地方のセンターにおいてもその場で活動していた人々が必ずしも土着の人々であるわけではない。そうした保留条件を踏まえて中央と地方の関係を考える必要がある。それは巨大な織物のような関係で互いに繋がっており、いくつかの部品に分かれる構造ではないため、焦点を絞って一部分のみを取り出すことは不十分である。

各共同体の単位となるリヤクタは、1つのワカとそれを体現する首長、およびそれに属する人々から構成される(Salomon 1991)。首長は基本的に共同体のパカリナに結びつけられる。共同体数が大きくなれば、その全体をワカの集合と見ることができる。大きな社会になれば、複数の場の集合となり、複数のワカが併存することになる。しかし、相対的に大きな中心、ワカがあるとしても、その下位に他のワカが位置づけられるわけではない。大きなワカと併存する複数のワカがあると見なした方が良い。ワカに関しては中央とその周辺という階層性を伴った構造は想定しにくい。インカ帝国の政治構造についても同様であり、首都以外の複数のセンターは明確な層をなしているわけではなく、行政単位が入れ子状の構造を有すると見なした方が適切である。ピラミッドとして表すことは適切な方法ではない。

社会の基本単位である人間を点で表せば、点の集合が社会単位であり、社会間の境界は入り組む(Ramírez 2005)。点の密度は中心の方が濃く、遠くなれば薄くなるという差はあるが、社会間の空間的な線引きは難しい。考古学データを扱う際、この点に気をつけなければならない。大規模社会の遺跡は1つの点として認識されるため、その点が中心との関係で空間的にどこに位置するか、社会文化的にどのような関係にあるのかを把握しないと整合的な解釈はできない。アンデスの空間認識は、中心に着目すべきであり、中央と他の場所との関係性に着目して議論すべきである。また各地方の状況を明らかにするためには、できるだけ大きなセンターを調査することが望ましい。

V インカ帝国の 民族集団

インカ帝国の成員は、大きくインカ族と非インカ族に分けら

れる。インカ族はさらに「血縁によるインカ」と「特権によるインカ」に分けられる(ガルシラソ 2006[1609]: (一)122-127, 136; Rowe 1946; 渡部 2009)。特権によるインカとは、本来別であった民族集団が、その功績によりインカとして認定された集団であり、主にクスコ盆地周辺部の民族が認定された。先にクスコが人を指すにも使用されたことを述べたが、「別のクスコ」の周辺の元々の住民は「特権によるインカ」と認定されず、「特権によるインカ」はクスコ盆地に近い集団に限定されたようである。

非インカ族は、征服後に、民族集団、行政単位として再編成された(渡部 2010)。各民族集団はそれぞれ名前を有し、個別の頭飾り、服装を有した。さらにここで特筆すべきは、支配下にあった民族集団が、他の場所へ移動させられたということである。インカ王の政策によって移動させられた集団は、ミトマと呼ばれ、全人口の4割にあたるという試算もある。そして各民族集団は、移動先で頭飾りや服装を変更することは禁じられた(アコスタ 1966[1590]: (下)309; Cobo 1653: lib. XIII, cap.23; 1964: tomo 92, 109; ダルトロイ 2012: 143; ハヤシダ & グスマン 2012: 339)。

考えてみよう。首都クスコやそれに準じる地方行政センターでは、多民族性が認められる。少なくとも16世紀のスペイン語の史料の記述からはそのように再構成できる。首都クスコには各地から集まった民族集団がいた。首都の特徴の1つは、民族集団の多様性である。しかしながら、現在扱える考古学的証拠からはそのような想定とは逆の状況が浮かび上がる(ダルトロイ 2012: 143)。建築や土器などを見ても、多民族性を示すような物質的な証拠がないのである。首都クスコには、インカ様式の建物しかない。そして土器もインカ様式のものだけである。例えば地方の集団が製作した土器などがクスコやその周辺の遺跡から出土することは非常にまれである。例外的に、例えばマチュピチュ遺跡でチムー様式のオレンジ色の土器が出土している(Burger & Salazar [eds.] 2004)。史料からは頭飾りや服装に多様性が認められると再構成できるが、建築や土器などが多様であると書かれているわけではない。では考古学データとして残存する硬い物質文化をどのように解釈すれば良いのか。ここでは、あくまでローカル性を論じるための手がかりとしてどのように利用できるかを考えてみたい。

インカ帝国の首都では物質文化の画一性が認められる。同じような特徴のものが地方で認められれば、帝国支配の証拠と解釈されるが、もし首都とは異なる特徴を持った物質文化が出土すれば、それはローカルなものと判定される。

土器については、クスコ周辺で確認されたものを標準とす

るならば、その器種全てが認められる遺跡のある地域はクスコ以外にはない(Bray 2003)。土器の取捨選択がどのような基準で行われたのか、明確には分からない。クスコにしか認められない土器もあるが、一方で、どの遺跡においても出土する土器もある。それはアリバロスと呼ばれる尖底壺形土器であり、酒用の壺である。そのためアリバロスという器形は共通性を示すことになる。しかしアリバロスをはじめとする土器の紋様などには地方独自の特徴が認められ、それらはローカルな特徴とされる。在地の土器との融合が認められる土器は、地方インカ様式と総称される。

土器をインカ様式に代えてしまえばいいのだが、なぜ在地土器の製作が継続したり、融合したりするのか。インカがインカ様式土器の製作を強制しなかったという考え方もできる。フランシス・ハヤシダらは、「生産者が労役義務を果たしたことを確認するため、インカ国家は地方様式の土器を引き続き生産することを奨励、あるいは要求した」(ハヤシダ & グスマン 2012: 339) 可能性を指摘している。この解釈に従うのであれば、例えば、インカの支配下でチムー様式の土器製作が続けられたのは、インカによる奨励の結果ということになる。本来の活動の場で土器製作が続けられた以外に、ミマとして移動させられた先の場所でもチムー様式が出土することは、ハヤシダらの解釈を支持する状況証拠である(Moore & Mackey 2008: 801)。この解釈が可能であるならば、ローカル性を示す特徴が中央の支配の一形態を示す場合もあり、それを在地の人々による選択の結果と識別することは難しい。同様に、支配下の民族集団の頭飾りや服装の変更を禁じるという政策の結果、異なる特徴が元々の場所から離れたところで認められることになる。また、信仰でも同様にインカ族は全ての民に統一して太陽信仰を強制したのではなかった。キリスト教やイスラム教の歴史のように、支配下の人々に信仰を強制するのではなく、各集団のそれまでのワカ崇拝を認めた。そしてインカ王のワカである太陽と併存させることによって、インカと他の民族集団との関係性を示した(ガルシラソ 2006[1609]: (二)296)。また地方のワカを表す偶像をクスコに捕虜として持って行くという習慣もあった(Cobo 1653: lib. XIII, cap.23; 1964: tomo 92, 110)。

これまで、アンデス研究者がローカルという言葉に託していたのは、地方の人々の主体性、エージェンシーという意味なのであるが、少なくともインカの場合は、それには当てはまらない要素もある。つまり、インカ様式の器形の土器に地方独自の紋様を施紋することなどは地方の主体性の表れと見なすことができるが、その一方で民族集団ごとの服装や頭飾り、チムー様式土器の継続的製作など、国家による地方統治の結

果、地方に局地的な、つまり範囲が限定される特徴が継続、創出するということがある。そのため、地方の特徴を全てひっくめてローカルと呼ぶことが妥当かどうかを検討する必要がある。ある特徴が、中央との関係性を示すものであれば、より大きな枠組で説明する必要がある、全体のどの部分に対応するかを見定める必要がある。譬えれば、単独の要素に着目することは、織物の一部を見ていることになり、不十分である。その位置関係、配置を考える必要がある。

VI ローカル性のレベル

ある特徴が認められる地理的範囲が狭いことがローカルの条件であり、広範囲に分布するものはローカルではない。当然ながら首都と同じものが地方で認められればそれはローカルなものとはされない。つまりローカルという単語は、中央集権的な動きを否定する文脈で使用されてきたと言える。それは地方のエージェンシーという議論と平行関係にある。そして複数のローカル性が集合すると、多様性と同義となる。ワリ研究でも多様性は多用され、ワリ帝国を否定する文脈でも用いられることがある(cf. Topic & Topic 2010)。しかし、ローカルと見える現象には、帝国支配など中央からの動きの結果もあり、ローカルとは関係性を示す概念であるため、地方だけを切り取って単独で認定できるわけではない(Isbell 2010: 234)。

これまでのインカ研究では、土器が優先的に分析されてきた。インカ帝国の支配下には80~100の民族集団があったが、それぞれに対応する土器があるわけではない。在地の土器様式が確認されているのは一部である。地方インカ様式土器は特定の地域、人々の間で共通に認められ、インカ期以前に目立った特徴を有する土器が製作されていたところで認められる。例えば、ペルー北海岸のチムー=インカ様式(ハヤシダ & グスマン 2012)、チリのディアギーター=インカ様式(González Carvajal 2008)、といった融合様式がある。そもそも、アンデス考古学では識別可能な目立つ土器を製作する文化に着目されるが、ペルー北高地のワマチュコなど土器ではなく建築などに力を注ぐ文化もあった。インカ期以前にどのような土器が製作されていたかが判明している地域の方が少ない。そして、インカ期以前に認定されている土器様式の数よりも、インカ帝国の支配下の民族集団の数の方が多

い。

インカ様式と融合する特徴であれば、議論しやすいであろう。しかし、インカ期にそれまでの土器の特徴が変化しなかった場合もある。その場合、在地性を逆に議論しにくくなることは皮肉である。インカ期のローカル性を論じるためには同時代性が前提となるため、時代が異なれば、それは時期差を示す特徴となってしまうからである。中央の、つまりこの場合は、インカ様式の要素が採り入れられていれば、同時代のものであると判断できるのであるが、そうでない場合は、それだけではインカ期のものかどうかは分からない。例えば、筆者が調査しているカハマルカ地方では、インカ期に土器様式は大きく変わらず、そのまま使用され続けた。カハマルカ晩期のアモシユルカ・コンプレックスが後 1200 年頃から 1532 年にスペイン人が侵入するまで製作が続けられた(渡部 2010)。そのため、土器の連続性の証拠を、カハマルカの在地性と捉えることもできるが、それは一体何を意味するのか。地方の人々が意図的に土器製作を続けたのか、あるいはハヤシダらが指摘するように、インカ国家に奨励された結果なのだろうか。一方で、行政センターにおける出土土器のほとんどはインカ様式土器であることが報告されている(Morris & Thompson 1985)。この二項対立的な物質文化の現れ方が、インカ文化の特徴と言える。それは一体、統治の問題なのか、あるいは信仰や儀礼の問題と考えたらいいのか。いずれにせよ、インカの特徴を採り入れない土器製作が続けられた場合、それをインカ期の土器と判定することは難しく、同時代であることを説明しなければインカ期のローカルな特徴と説明できない。

ローカル性を通時的に分析するためには、ローカルな特徴の範囲の広さ、想定される人口数の時期的変化を把握することが必要となる。具体的な数を出すことは難しいため、想定されるローカル性の通時的な相対変化を見ることで、他の要因、中央の力の強度を測ることが建設的である。先に述べたが、インカ期におけるチム様式土器の製作自体が、インカによる支配戦略の結果だとすれば、ローカル性の範囲の広さがローカルな集団の力の強さを示すのではなく、むしろ中央の力に対応している場合もある。例えばペルー南海岸のチンチャ社会もインカ帝国の支配下で繁栄した(渡部 2010)。インカ帝国の支配下においては、ある程度の規模の社会を形成すること、そしてそれらを識別する物質的指標を付与することが統治のために効果的であったと言える。

議論を整理すると、地方におけるローカル性は常に中央との関係で議論すべきであり、中央からの動きに対する働きだけでなく、中央の力と平行して我々がローカルと呼ぶ現象を産み出されることもある。これまで一枚岩的な帝国支配を

否定する文脈でローカルな特徴が強調されてきたが、むしろそれは中央の支配の強さと裏と表の関係なのである。そのため決して否定形のみでローカルという概念を使用すべきではない。ローカルという概念が関係性を示すということは、科学的知識と在来知が対置される、あるいはグローバルとローカルが対置される図式と同様である。ローカルという概念は、関係性を議論する枠組であることを確認しておきたい。

本論では共時的な分析を行っているが、ローカルな現象が目立つ時代と、グローバルな現象(ホライズン現象)が目立つ時代を対比させ通時的に分析することもでき、それも関係性を示すと言える。ただし、前の時代の社会が後の時代により大きな社会に組み込まれることも想定されるため、ローカルな時代とグローバルな時代をきれいに分けて分析できる訳ではない。ローカルな現象がグローバルな時代にも残存することはよくあり、むしろグローバルな時代にこそローカルな現象は、顕在化する。あくまでヒューリスティックな議論であるが、デュアル・プロセス・モデル、振り子モデル(リーチ 1995[1954]; 渡部 2010) など、関連するモデルを整理して、ローカル性の通時的検討を行うことを別論文の課題とした。

Ⅶ ワリ帝国

インカ帝国を事例としてここまでローカルな現象をどのように分析するかを検討してきた。ローカルな現象と一緒にしてきた諸特徴には様々なレベルがあるが、ここでは地方支配に焦点を合わせて整理し議論する。

ワリ帝国(図2)については、その研究史自体がローカル性の考察と密接に関係している。20 世紀のはじめ、ドイツ人研究者マックス・ウーレは、ペルー中央海岸のパチャカマ遺跡、および北海岸のモチエ遺跡のワカ・デル・ソルからの出土遺物とボリビアにあるティアワナコ遺跡の図像との類似性を指摘した(Uhle 1991[1903], 1998[1913])。1940 年代に、ラファエル・ラルコ=オイレは、ペルー北海岸で発見されたティワナク文化とされていた遺物の特徴が、肝心のティアワナコ遺跡で認められる特徴よりもアヤクーチョ地域の文化と類似していると述べた(Larco Hoyle 1948: 37)。そして 1940 年代にジョン・H・ロウらがアヤクーチョ地方でワリ遺跡を再発見した(Rowe *et al.* 1950)。ワリ遺跡を中心とした国家が存在したと想定され、後のインカ帝国がモデルとなった(Menzel

1964)。ペルー北海岸を事例として、遺物のローカルな特徴に着目し、そのことが新たな中央の発見になった。ただし、ラルコ=オイレが着目していた特徴は結局、ローカル性よりも、むしろティワナク遺跡とは異なるもう1つの中心に近い特徴だったと言える。

中央が拡大し続けるのがアンデス社会の特徴であると述べた。ワリ帝国はインカの祖型とされるが、インカのモデルをそのまま当てはめてワリ帝国を説明できるわけではない。まず首都のコピーを建設するという特徴が、明瞭ではない。インカは道路網を整備し、クスコの機能の一部を備えた「別のクスコ」を複数建設した。ワリ帝国では、インカ帝国と同様に地方支配の拠点として行政センターを設置したと考えられる⁸ (Isbell & Schreiber 1978)。行政センターの建設自体は国家による地方支配のためである。従って、考古学者が行政センターと呼ぶ施設の建設自体がローカルなものかどうかという議論はしない。ローカル性を論じるのは、各センターの建築の特徴や出土遺物の特徴についてである。

ワリ帝国では、首都ワリと行政センターの間では違いが目立ち、地方センターと首都との間に相似性を認めにくい。一方、行政センター間には共通点が目立つ。一方で、同じ場所で建築物の更新を行うなど、いくつかの特徴において首都ワリと類似した地方の遺跡もある。例えばペルー南高地クスコ地方に位置するワロ遺跡群 (Zapata 1998, 2019)、ペルー北部高地にあるエル・パラシオ遺跡 (渡部 2014) などである。そのため行政センターとされている諸遺跡を分類することが、ローカル性をより精緻に議論することに繋がると考えられる。

早い時期から注目されてきた2つの行政センター、ピキリヤクタ (Sanders 1973) とビラコチャパンパ (McCown 1945) は、矩形の設計で、内部が複数の部屋状構造に分割されるという特徴を有する (Rowe *et al.* 1950: 23)。イズベルはこの建築特徴が広い範囲に認められる現象を「直交する細胞状建築ホライズン (Orthogonal Cellular Architecture Horizon)」と称した (Isbell 1991)。この特徴を備えた建築を有する遺跡は広範囲に分布するが、肝心の首都ワリでは

明瞭ではない。ワリ遺跡の一部の地区にこの建築の特徴が認められるのみである。そのため、首都の特徴の一部を切り取って拡大したのがピキリヤクタやビラコチャパンパなどの行政センターであると説明できよう。これらのセンターは国家による地方統治のために設置されたものだが、各行政センター間には違いがあり、そこにローカル性を見て取ることができる。ローカル性を論じるためには首都や他のセンターとの相違点に着目する必要がある。トピックは多層構造などビラコチャパンパ遺跡のローカルな特徴を強調するが (Topic 1991)、その建設自体は国家事業であるとし解釈できない。首都の動きに連動して、建築の特徴において顕在化したローカル性という説明も可能であろう。

さらに、ビラコチャパンパやピキリヤクタをはじめとするワリ帝国の行政センターで出土するワリ様式土器は少なく、全体の1割未満であることに留意する必要がある。それは、ワリ様式土器の利用が非常に限定されていたためと考えられる (渡部 2014)。出土土器の大半がインカ様式であるインカ帝国の行政センターとは逆の現象である。ほぼ全てのインカ期の遺跡で出土するインカ様式土器アリバロスは壺であり、人々に酒を振る舞う儀礼的性格を有する土器である。一方、ワリ様式土器は同じく酒用の土器であるもの、おそらく使用者を識別するような土器であり、利用者は限定されており、多くの人々にとってワリ様式土器の使用は禁止されていたと想定できる⁹。ワリ様式以外の在地の土器製作がワリ様式土器の禁止の結果であるとすれば、それは国家による支配を間接的に示していると言える。この場合、ローカルな土器が出てきても、それは、ワリ帝国の支配下における統治方法に則っているのであって、決して地方の人々がワリの支配に抵抗した証拠ではないのである。

地方におけるローカル性は両面性を示し、中央の動きと連動する場合と、逆に中央の特徴から識別される場合とがある。局地的現象であるローカルな特徴は、ワリ帝国の支配域内における関係性を示し、新しい時代の新たな現象と考えることができる。中央との関係でローカル性を議論する際に、ある程度の時間の厚みがある場合、伝統という概念と結びつく¹⁰。ロー

8 ただし行政センターと解釈することを疑問視する研究者もいる (Jennings 2006b; Topic 1991; Topic & Topic 2010)。例えばジェニングスはワリのセンターとされている20遺跡のうち、6つのみが国家によって建設され、残りは在地の人々がワリの形をまねて建設したという (Jennings 2006b: 270)。本論文では、ワリ期に建設が始まりワリの崩壊と共に放棄された遺跡をワリの地方統治のための拠点と解釈づけている。それをインカ期のタンパと同様に行政センターと記述するのがいいのか、あるいはいくつかのカテゴリーに分類するのがいいのかを今後検討する必要がある。そのためにはまずインカ帝国の行政センターのバリエーションを整理することが有効であろう。また筆者は地方におけるワリ関連遺跡を行政センター、奉納、墓、の3つに分類している (Watanabe 2019)。

9 デイトラーは国家の催す饗宴を、多くの人々を動員する支配者が寛大さを見せつける饗宴 (patron-client feast) と参加者を識別する饗宴 (diacritical feast) の2つに分類している (Dietler 2001: 83-85; Jennings 2006b: 275)。インカの饗宴は前者、ワリの饗宴は後者に近い。

10 南アメリカの考古学においては、伝統は特に土器伝統を指すものとして使用される (Phillips & Willey 1953: 626)。

カル性がある時点以前の歴史的背景にその起源を求めるのであれば、つまりその土地に元々あるものから展開した文化的特徴であれば、歴史性を必然的に考える必要がある。

土器を例にとれば、その土地の土器伝統を踏襲しつつもワリ様式土器を模倣することが、在地の人々の意思をある程度示す証拠かもしれない。中央からの押しつけをアレンジしたのではなく、自分たちの土器製作のレパートリーに採り入れたと考えた方が分かりやすい事例が多くある。例えば、カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡で出土した、カオリンと呼ばれる粘土を用い、ワリ様式の器形・紋様を採り入れた、コップ形土器、山形紋様を伴う土器、十字紋を伴う鉢形土器などである(Watanabe 2019)。ただしワリとカハマルカの融合様式土器の数は少なく、エル・パラシオ以外の遺跡で、表面調査で収集されたこともない。ワリ様式の典型的な濃いオレンジ色の胎土の土器は少なく、カオリンなど在地の粘土を用いた土器は在地の土器製作の特徴である。では融合土器は何を意味するのだろうか。在地のカハマルカの人々がワリの権威¹¹を利用したと想定する場合、権威を利用できる中央集権的な社会体制があったことが前提となる¹²。例えばカハマルカの支配者の墓の副葬品として融合土器が見つければ、そのような解釈も可能だが、そのような事例はこれまで確認されていない。そもそもカハマルカ文化の遺跡に階層性や中央集権的な特徴を読み取ることは難しい。カハマルカには中央集権的な社会はなく、非中央集権的な無頭型の分節制社会があったと想定できる¹³ (Watanabe 2014: 125)。筆者はカハマルカ社会がペルー北海岸の国家モチェやペルー北高地南部のレクワイ社会とは異なり中央集権的ではないため、ワリの文化と共存できたと解釈している。もし中央集権的な2つの社会が対峙した場合は、性格が似ているため融合しやすく、逆に性格の異なった社会が接触した場合は、混じり合わず共存することができるという解釈である(Watanabe 2014: 124)。

エル・パラシオ遺跡の融合土器は基本的に覆土の中から出土しており、奉納や墓などの特別なコンテキストから出土するわけではない。そのため、ある一部の集団が他の集団と識別するために融合土器を製作・利用した可能性、あるいはそのような意図はなく、土器製作者が遊びに近い感覚でワリの要素を採り入れた可能性などが想定できる。もともと土器製作者にそのような自由度が認められていたかをまず検討する必要はあるが¹⁴。文化のインターアクションの結果として融合土器を考えるのであれば、もう1つ検討に値する視点は、出自に基づく文化の継続¹⁵、婚姻による文化変化である(Stein 2002: 906-907)。

ワリ文化のペルー南海岸版土器が、橋型把手付き双注口壺であり、これは中央海岸にも認められる(Menzel 1964)。そしてカハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡では橋型把手付き双注口壺がワリ様式土器の中では相対的に多く見つかっている。この器形は元々南海岸のパラス文化にその起源を辿ることができるが(Menzel *et al.* 1964)、ナスカ文化を経てワリ文化に採り入れられ、ワリ期に北高地を經由してペルー北海岸の北部に広まった。そしてペルー北海岸で見つかるのは、基本的にヘケテペケ川から以北であり、北海岸南部のモチェ、チカマなど、鐙形土器が優勢であった地域には認められない。ワリ帝国の崩壊後、ヘケテペケ以北にはシカン文化が繁栄し、その南の鐙形土器の分布するチムー文化の範囲とは対峙することになる。ただしシカン文化の土器の中で、橋型把手付き双注口壺は少数であり、主流は高台付き長頸壺である(Shimada [ed.] 2014)。いずれにせよ、後の後期中間期のローカル性は、それ以前のワリ帝国期における土器製作状況が顕在化した結果と言える。それは、アプロプリエーション、あるいは創られた伝統といった文化人類学の概念を想起させる事例である(綾部編 2002)。ペルー北部における橋型把手付き双注口壺の事例は、ローカル性が、中央との関係で操作され、明確化し、固定化していった状況

11 ジェニングスは、ワリの文化資本(Jennings 2006a: 365)、象徴資本(Jennings 2006b: 277)という概念を用いている。威信財という概念と類似している。

12 例えば、ペルー北海岸のサン・ホセ・デ・モロ遺跡では、墓の副葬品としてワリ様式土器、カハマルカ様式土器などが見つかっている(Castillo 2001a, 2001b)。このような場合、在地の支配者がワリの権威を利用したという解釈が妥当であるように見える(Chapdelaine 2010)。しかし、ワリ様式の副葬品を伴う墓の被葬者がほとんど女性であるという特別なコンテキストであり、その理由を説明する必要がある。

13 当然ながら、分節国家というモデルが示すように(Southall 1988, 1999)、分節社会と階層社会が共存する場合もあるが、カハマルカ社会にはそのような証拠は見当たらない。

14 マコフスキはティワナク遺跡の石彫の図像について、「構造的図像」と説明し、それが掘る者の裁量に任せられていた部分は一切ないと解釈している(Makowski 2002: 346)。土器の製作についても、国家により厳格に管理されていた部分とそうでない部分を峻別することが必要である。

15 土器と出自を結びつける解釈として、島田はランバイエケ文化のチョルナンカブ遺跡で検出された女性の墓に海岸カハマルカ様式の土器が副葬品として多くあったことから、この人物がカハマルカ出身であった可能性を示唆している(島田 & 篠田編 2017: 162)。

を確認できるアンデスの事例の1つである。

カハマルカ文化ではカオリン土器で製作された土器の主な器形は碗であり、壺は極めて少なく、ワリ期の遺跡エル・パラシオなどで数点確認されたに過ぎない。碗は土製スプーンとセットで使用されたと考えられる。スプーンはカハマルカ文化では早期から晩期まで連続的に使用されている (Watanabe 2009)。カオリン土器のスプーンは小型であり、カハマルカ褐色磨研土器 (Cajamarca Brown Polished)、カハマルカ黒色磨研土器 (Cajamarca Black Polished) といったタイプのスプーンは大型である。一方、スプーンはワリ遺跡でも出土しており、大型のものがほとんどである (Cook 2009)。大型のスプーンに類似性があるとすれば、装飾のあるカオリン土器のみに着目して、ワリとの関係、ローカル性を論じるのは不十分であり、道具のセット、組み合わせを考える必要がある。

建築の特徴にもローカル性が認められる。例えば、エル・パラシオ遺跡における複雑なカナル (水路)・システムの存在、およびその更新はペルー北高地のローカルな特徴であり、他の行政センターでは確認されていない。ペルー北高地においては形成期から神殿においてカナルは造られ続けており、後期中間期からインカ期に利用されたタンタリカ遺跡でも確認されている (Watanabe 2011)。いずれも農業用、あるいは飲み水用のカナルではなく、入口と出口がある儀礼用のカナルである。他のワリ関連遺跡で、エル・パラシオに見られるような複雑なカナルの存在は報告されていない。こうした特徴を強調すれば、ローカル性が前面に押し出される。トピックによるペルー北部高地ワマチュコ地方のピラコチャパンパ遺跡などを事例に、多層構造などが在地の特徴であり、逆にワリに影響を与えたのだという論理構成と同様である (Topic 1991)。しかしながら、エル・パラシオの建設自体は完全なる国家事業であり、その中にカナルが組み込まれたことはレベルを分けて考えるべきである。

カナルと土器の次に、ローカル性を考える材料として図像表現に着目したい。インカ様式土器は、器形にこだわる土器であり、施紋には比較的 자유が認められていた。アリバロスという尖底壺はほぼ全てのインカの遺跡で見つかるが、そこに描かれる紋様は地域ごとにバリエーションがある。例えばペルー北海岸を中心に製作されたチムー=インカ様式土器の多くは、器形はインカのアリバロスの器形で、黒色で彩紋されたものである (ハヤシダ & グスマン 2012)。稀にオレンジ色の土器もある (Burger & Salazar [eds.] 2004)。一方でチムー=インカ様式土器とは別に、インカ期になっても製作が続

けられたチムー様式の鏡形土器もある。在地の土器様式 (チムー様式) と、外来の土器製作との融合様式 (チムー=インカ様式) の関係性をどのように説明すればいいのかわかり、十分に議論されてきたわけではない。現状では議論の手がかりとして、器形と図像表現は別のレベルであったのではないかと提案したい。

ワリ様式土器の融合の場合、ワリ様式の器形と、地方様式の胎土が組み合わさる例が多い。紋様はワリ様式のものである場合も、ローカルな紋様である場合もある。カハマルカ地方のエル・パラシオ遺跡を例とすれば、融合土器の多くはケロと呼ばれるコップ形土器などワリ様式土器の器形であり、カオリンの胎土を有する。紋様は多くの場合山形紋様など、ワリ様式のものである。カハマルカ文化の土器タイプの1つカハマルカ・フローラル・カーシブ (Cajamarca Floral Cursive) の紋様が、コップ形土器に採用された例もある (Watanabe 2019: Figura 10)。一方で、カハマルカ様式土器の多くは高台付き碗であり、その器形がワリ様式土器の胎土で製作されることはない。またワリ様式の紋様がカハマルカ様式の碗に採り入れられるということはほぼなく、エル・パラシオ遺跡では内面に山形紋様を伴う碗の破片が1点確認されているのみである。

インカの場合、そもそもインカが土器の紋様にこだわっていなかったのであれば、中央の規範的な紋様を地方の人々が模倣するかどうかは、中央への反発ではなく、別の意味でのローカル性と考えられる。一方、ワリ様式土器の場合は、ワリ様式の紋様、器形の利用が限定されていたと仮定するならば、それらをあえて模倣したことは、ワリの権威を利用としたか、あるいは中央への反発という解釈と整合的である。

ワリ文化とカハマルカ文化の関係を考察する際には器形が重要であることを確認したが、一方でワリ様式土器の地域差を分析するには図像が鍵となる。ワリ様式の同じ器種の土器においては、図像表現に中央と地方の違いが現れる。ある図像は首都周辺にのみ現れ、逆に地方にのみ現れる図像もある。ティワナク文化と共通する、両手に槍と投槍器を持った人物が大型土器に表現された大型土器は、コンチョパタ、南海岸のパチェコで確認されている (Isbell & Cook 1987)。この図像を伴う大型土器はペルーの中央部、北部でこれまで確認されていない。図像の一部である顔が描かれた事例があるのみである。一方で、土器や織物に描かれたグリフィンと命名された鳥の図像は、当初ペルー中央海岸のパチャカマ様式 (ワリ様式土器の1つのタイプ) を事例として命名されたが (Menzel 1964)、首都では出土せず、地方、特にペルー中央部、北部に限定される。またそれに平行するか

のように、エル・パラシオ遺跡では、鳥の図像表現が多く現れる(渡部 2012)。一方、首都ではむしろネコ科動物が主役である。

インカ帝国はゲアマニーと呼ばれる地方単位に分けられていたという(Guaman Poma 1987[ca.1615]: 738[752])。ケチュア語ではゲアマンは鳥のことを指す(González Holguín 1989[1609]: 145)。地方と鳥が結びつくという意味で、間接的ではあるがインカとワリの間で平行関係が認められる。インカ帝国とワリ帝国は、行政センターとされる遺跡の分布が類似することは、インカ帝国におけるゲアマニーのような地方単位に分けられていたと想定する状況証拠となる。ワリ帝国の崩壊後、ペルー北部においてはシカン文化で鳥の図像が残り主流となるが、これも元々中央との関係性において利用されていた図像が、その後も選択された結果と見ることができる。

パトリシア・ノブロックは、ワリ終末期における図像の変容が認められることから、ワリの支配者が図像によるイデオロギー操作が失敗した可能性を指摘している(ノブロック 1991: 123)。ではそもそもワリの図像の規範はどのようなものであったのか、そして特に地方に認められていた図像とはどのような特徴を有していたのであろうか。ワリでは器形と図像はどのような関係にあったのか。それをローカルという視点からどのように理解することができるのか。ここでは、1つの見通しを述べておきたい。

それは図像そのものにすでにローカル性、地方性が付与されていた可能性である。ネコ科動物、猛禽類、蛇(あるいは魚)という3種類の動物のセットは、形成期中期から頻繁に現れるが(Burger & Salazar 2008: 91)、ワリ帝国において鳥は地方に顕著に認められる。ワリ様式の土器に現れる図像である以上、鳥という地方性は、中央との関係で、中央の意向に従って決まっていると予想できる。アンデスの国家社会は中央が極端に大きく、地方のセンターの規模は首都と比較すれば小さい。しかし、中央の力が弱くなれば、地方の存在感は相対的に増してくる。地方センターから離れた場所であればなおさらである。中央から付与された属性だとしても、それを逆手にとってローカル性が顕在化してくることもあるであろう。そのような、アプロプリエーションと呼べるような現象がワリ帝国末期に生じていたのではないか。それを検証するためには図像の詳細な分析から細かい編年を組み立てる必要がある。

VIII おわりに

本論文ではローカル性を分析するため、古代アンデスのインカ帝国とワリ帝国を事例として、中央と地方の関係性に焦点を当て、論じてきた。ローカル性は、グローバルと対峙されるにせよ、そして在来知と科学知が分けられるにせよ、関係性を示す概念である。このように説明すると、構造分析と類似する。そうすると、構造分析批判にならえば、その関係性の中に埋め込まれている個、エージェントそのものを議論することが次の段階の作業となろう。関係性の中で付与された器形や図像などが、その後の伝統になる場合もあるし、帝国支配以前からの地方のローカルな伝統がさらに強化される場合もある。

これまでローカルという言葉で一括してきた様々な事象を、ある基準でいくつかのレベルに分類して、より精緻な議論をする段階にかかっていると思われる。いくつかのモデル、仮説を提示して、それを検証する、あるいはそれと状況証拠との整合性を確認するという方法で、少しずつ議論を進めていく必要がある。

そして通時的分析に基づく、ローカル性のみが強まる時期とグローバル性が目立つ時期の関係性、2つの流れのメカニズムをモデル化することも、今後の課題としたい。

謝辞

松本雄一氏(山形大学)から内容について建設的で貴重なコメントをいただいた。深謝したい。本研究は科学研究費補助金(19H01396、19H05734、23682011、19682004)による研究成果である。また本研究は南山大学 2019 年度パッハ研究奨励金 I-A-2 の成果である。

参考文献

- (日本語文献)
 アコスタ、ホセ・デ
 1966[1590] 『新大陸自然文化史』増田義郎(訳)、

- 岩波書店。
- アリアーガ
1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」 増田義郎(訳)、『ペルー王国史』, pp. 363-606. 岩波書店。
- 綾部恒雄(編)
2002 『文化人類学最新術語 100』弘文堂。
- ウイリー、ゴードン & ジェレミー・サブロフ
1979[1974] 『アメリカ考古学史』小谷凱宣(訳)、学生社。
- ウォーラー・ステイン
1981[1974] 『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』 1&2、川北稔(訳)、岩波書店。
- ガルシラーソ・デ・ラ・ベータ、インカ
2006[1609] 『インカ皇統記』(一) ~ (四)、牛島信明(訳)、岩波書店。
- ギアーツ、クリフォード
1991[1983] 『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集』梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美(訳)、岩波書店。
- シエサ・デ・レオン、ペドロ・デ
2006[1553] 『インカ帝国史』増田義郎(訳)、岩波書店。
2007[1553] 『インカ帝国地誌』増田義郎(訳)、岩波書店。
- 島田泉・篠田謙一(編)
2017 『古代アンデス文明展』 TBS テレビ。
- ダルトロイ、テレンス・N
2012 「インカ帝国の経済基盤」竹内繁(訳)、『インカ帝国——研究のフロンティア』 島田泉・篠田謙一(編)、pp. 121-149、東海大学出版会。
- 中空萌
2019 『知的所有権の人類学——現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知』世界思想社。
- ノブロック、パトリシア・J
1991 「帝国の工芸家たち——ワリ帝国時代の美術」松本亮三(訳)、『古代アンデス美術』増田義郎・島田泉(編)、pp. 107-123、岩波書店。
- ハヤシダ、フランシス & ナタリア・グスマン
2012 「インカ支配の物質的記録を読む——ペルー北部海岸からの考察」 渡部森哉・市木尚利(訳)、『インカ帝国——研究のフロンティア』 島田泉・篠田謙一(編)、pp. 321-349、東海大学出版会。
- 藤垣裕子
2008 「ローカルナレッジと専門知」『岩波講座哲学第4巻 知識／情報の哲学』飯田隆他(編)、pp. 101-120、岩波書店。
- 藤本強
2007 『都市と都城』同成社。
- マコフスキ、クリストフ
2012 「都市と祭祀センター——アンデスにおける都市化についての概念的挑戦」渡部森哉(訳)、『年報人類学研究』 2: 1-66。
- リーチ、エドモンド・R
1995[1954] 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫(訳)、弘文堂。
- 渡部森哉
2007 「インカ国家における地方支配——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例」『国立民族学博物館研究報告』 32(1): 87-144。
2009 「インカ帝国における多民族・多文化状況」『地球時代の多文化共生の諸相——人が繋ぐ国際関係』浅香幸枝(編)、pp.197-218、行路社。
2010 『インカ帝国の成立——先スペイン期アンデスの社会動態と構造』春風社。
2012 「グリフィンは飛んでいく——動物図像から見る中央アンデス先スペイン期ワリ国家の地方支配」『共生の文化研究』 7: 73-86。
2014 「ワリ帝国の行政センターと地方統治——ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例」『古代アメリカ』 17: 25-52。
2019 「文明の誕生——古代アンデスの事例から」『史林』 102(1): 7-39。
- (欧文文献)
Bauer, Brian S.
1998 *The Sacred Landscape of the Inca: The Cusco Ceque System*. University of Texas Press.
2018 *The Ritual Landscape of the Inca: The Huacas and Ceques of Cuzco*. In S. Alconini & R. A. Covey (eds.), *The Oxford Handbook of the Incas*, pp. 481-496. Oxford University Press.

- Blanton, R. E., G. M. Feinman, S. A. Kowalewski & P. N. Peregrine
 1996 A Dual Processual Theory for the Evolution of Mesoamerican Civilization, *Current Anthropology* 37(1): 1-14.
- Bray, Tamara L.
 2003 Inka Pottery as Culinary Equipment: Food, Feasting, and Gender in Imperial State Design, *Latin American Antiquity* 14(1): 3-28.
- Bray, Tamara L. (ed.)
 2015 *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*. University Press of Colorado.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar
 2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture*, pp. 85-105. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar (eds.)
 2004 *Machu Picchu: Unveiling the Mystery of the Incas*. Yale University Press.
- Castillo, Luis Jaime
 2001a The Last of the Mochicas: A View from the Jequetepeque Valley. In J. Pillsbury (ed.), *Moche Art and Archaeology in Ancient Peru*, pp. 306-332. National Gallery of Art.
 2001b La presencia de Wari en San José de Moro, *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 143-179.
- Cerrón-Palomino, Rodolfo
 2005 El aimara como lengua oficial de los incas, *Boletín de Arqueología PUCP* 8[2004]: 9-21.
- Chapdelaine, Claude
 2010 Moche and Wari during the Middle Horizon on the North Coast of Peru. In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp. 213-232. University of New Mexico Press.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas D. Hall
 1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.
- Christie, Jessica Joyce
 2018 Rock Shrines, Ceque Lines, and Pilgrimage in the Inca Provinces. In S. Alconini & R. A. Covey (eds.), *The Oxford Handbook of the Incas*, pp. 497-518. Oxford University Press.
- Cobo, Bernabé
 1964[1653] *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, tomos 91-92. Ediciones Atlas.
- Cook, Anita G.
 2009 Visllani Visllacuni: Patronos de Consumo a Comienzos del Horizonte Medio, *Revista Chilena de Antropología* 20: 205-226.
- Crickmay, Lindsey
 2006 Stone: Spanish 'mojon' as a Translation of Quechua and Aymara Terms for 'limit'. In P. Dransart (ed.), *Kay Pacha: Cultivating Earth and Water in the Andes* (BAR International Series 1478), pp. 71-76. Archaeopress.
- Dietler, Michael
 2001 Theorizing the Feast: Rituals of Consumption, Commensal Politics, and Power in African Contexts. In M. Dietler & B. Hayden (eds.), *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*, pp. 65-114. Smithsonian Institution Press.
- González Carvajal, Paola
 2008 Mediating Opposition: On Redefining Diaguita Visual Codes and Their Social Role during the Inca Period. In P. González Carvajal & T. L. Bray (eds.), *Lenguajes visuales de los incas* (BAR International Series 1848), pp. 21-45. Archaeopress.
- González Holguín, Diego
 1989[1608] *Vocabulario de la Lengua General de Todo el Perú Llamada Lengua Quichua o del Inca*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

- Guaman Poma de Ayala, Felipe
1987[ca.1615] *Nueva Crónica y Buen Gobierno*.
3 tomos. Edición, introducción y notas de
John V. Murra, Rolena Adorno y Jorge
L. Urioste. Crónicas de América. Núm.
29a-b-c. Historia 16.
- Isbell, William H.
1991 Huari Administration and the Orthogonal
Cellular Architecture Horizon. In W.
H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari
Administrative Structure: Prehistoric
Monumental Architecture and State
Government*, pp. 293-315. Dumbarton
Oaks Research Library and Collection.
2010 Agency, Identity, and Control:
Understanding Wari Space and Power.
In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls:
Regional Perspectives on Middle Horizon
Peru*, pp. 233-254. University of New
Mexico Press.
- Isbell, William H. & Anita G. Cook
1987 Ideological Origins of an Andean
Conquest State, *Archaeology* 40(4): 27-33.
- Isbell, William H. & Katharina J. Schreiber
1978 Was Huari a State?, *American Antiquity*
43(3): 372-389.
- Jennings, Justin
2006a Core, Peripheries, and Regional Realities
in Middle Horizon Peru, *Journal of
Anthropological Archaeology* 25(3): 346-
370.
2006b Understanding Middle Horizon Peru:
Hermeneutic Spirals, Interpretative
Traditions, and Wari Administrative
Centers, *Latin American Antiquity* 17(3):
265-285.
2010 Becoming Wari: Globalization and the
Role of the Wari State in the Cotahuasi
Valley of Southern Peru. In J. Jennings
(ed.), *Beyond Wari Walls: Regional
Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp.
37-56. University of New Mexico Press.
2011 *Globalizations and the Ancient World*.
Cambridge University Press.
- Jennings, Justin (ed.)
2010 *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives
on Middle Horizon Peru*. University of
New Mexico Press.
- Julien, Catherine
2000 *Reading Inca History*. University of Iowa
Press.
- Julien, Daniel George
1988 *Ancient Cuismancu: Settlement and
Cultural Dynamics in the Cajamarca
Region of the North Highlands of Peru,
200 B.C.-A.D. 1532*, Ph.D. dissertation,
Department of Anthropology, University
of Texas at Austin, Austin.
- Kumai, Shigeyuki
2002 Las fronteras y los límites del
Tahuantinsuyo: "el Tahuantinsuyo de
cada rey Inca" que debe confirmarse.
In J. Flores Espinoza & R. Varón Gabai
(eds.), *El Hombre y los Andes: Homenaje
a Franklin Pease G. Y.*, pp. 617-637.
Tomo II. Fondo Editorial de la Pontificia
Universidad Católica del Perú.
- Larco Hoyle, Rafael
1948 *Cronología Arqueológica del Norte del
Perú*. Sociedad Geográfica Americana.
- Lau, George F.
2005 Core-Periphery Relations in the Recuay
Hinterlands: Economic Interaction at
Chinchawas, Peru, *Antiquity* 79: 78-99.
- Makowski, Krzysztof
2002 Los personajes frontales de báculos en
la iconografía tiahuanaco y huari: ¿tema
o convención?, *Boletín de Arqueología
PUCP* 5[2001]: 337-373.
- Malpass, Michael A. (ed.)
1993 *Provincial Inca: Archaeological and
Ethnohistorical Assessment of the Impact
of the Inca State*. University of Iowa
Press.
- Malpass, Michael A. & Sonia Alconini (eds.)
2010 *Distant Provinces in the Inka Empire:
Toward a Deeper Understanding of Inka
Imperialism*. University of Iowa Press.

- McCown, Theodore D.
 1945 Pre-Incaic Huamachuco: Survey and Excavations in the Region of Huamachuco and Cajabamba, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnography* 39(4): 223-399.
- Meddens, Frank, Katie Willis, Colin McEwan & Nicholas Branch (eds.)
 2014 *Inca Sacred Space: Landscape, Site and Symbol in the Andes*. Archetype Publications.
- Menzel, Dorothy
 1964 Style and Time in the Middle Horizon, *Ñawpa Pacha* 2: 1-105.
- Menzel, Dorothy, John H. Rowe & Lawrence E. Dawson
 1964 *The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 50. University of California Press.
- Moore, Jerry D. & Carol J. Mackey
 2008 The Chimú Empire. In H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp. 783-807. Springer.
- Morris, Craig & Donald E. Thompson
 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. Thames and Hudson.
- Murra, John V.
 1972 El "control vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In J. V. Murra (ed.), *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, pp. 429-476. Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central, vol.2. Universidad Nacional Hermilio Valdizán.
- Pärssinen, Martti
 1992 *Tawantinsuyu: The Inca State and Its Political Organization* (Studia Historica 43). Societas Historica Finlandiae.
- Phillips, Philip & Gordon R Willey
 1953 Method and Theory in American Archaeology: An Operational Basis for Culture-Historical Integration, *American Anthropologist* 55(5-1): 615-631.
- Ramírez, Susan Elizabeth
 1996 *The World Upside Down: Cross-Cultural Contact and Conflict in Sixteenth-Century Peru*. Stanford University Press.
 2005 *To Feed and Be Fed: The Cosmological Bases of Authority and Identity in the Andes*. Stanford University Press.
- Reichlen, Henry & Paule Reichlen
 1949 Recherches archéologiques dans les Andes de Cajamarca: premier rapport de la Mission Ethnologique Française au Pérou Septentrional, *Journal de la Société des Américanistes* 38: 137-174.
- Rowe, John Howland
 1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In J. H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians, Vol. 2* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 143), pp. 183-330. Smithsonian Institution.
 1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation, *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1): 40-54.
- Rowe, John H., Donald Collier & Gordon R. Willey
 1950 Reconnaissance Notes on the Site of Huari, near Ayacucho, Peru, *American Antiquity* 16(2): 120-137.
- Rowe, John Howland & Dorothy Menzel (eds.)
 1967 *Peruvian Archaeology: Selected Readings*. Peek Publications.
- Salomon, Frank
 1991 Introductory Essay: The Huarochirí Manuscript. In F. Salomon & G. L. Urioste (eds.), *The Huarochirí Manuscript: A Testament of Ancient and Colonial Andean Religion*, pp. 1-38. University of Texas Press.
- Sanders, William T.
 1973 The Significance of Pikillacta in Andean Culture History. In *Occasional Papers in Anthropology* 8, pp. 380-428. Pennsylvania State University.

- Santo Tomás, Domingo de
1951[1560] *Lexicon o Vocabulario de la Lengua General del Perú*. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Seki, Yuji & Clorinda Tejada
2003 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2003)*. Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji & Juan Ugaz
2002 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú (Temporada 2002)*. Instituto Nacional de Cultura.
- Seki, Yuji, Juan Ugaz & Shinya Watanabe
2001 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú*. Instituto Nacional de Cultura.
- Shimada, Izumi (ed.)
2014 *Cultura Sicán: esplendor preincaico de la costa norte*. Fondo Editorial del Congreso del Perú.
- Southall, Aidan
1988 The Segmentary State in Africa and Asia, *Comparative Studies in Society and History* 30(1): 52-82.
1999 The Segmentary State and the Ritual Phase in Political Economy. In S. K. McIntosh (ed.), *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa*, pp. 31-38. Cambridge University Press.
- Stein, Gil J.
1998 World System Theory and Alternative Modes of Interaction in the Archaeology of Culture Contact. In J. G. Cusick (ed.), *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology* (Occasional Paper No. 25), pp. 220-255. Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University.
2002 From Passive Periphery to Active Agents: Emerging Perspectives in the Archaeology of Interregional Interaction, *American Anthropologist* 104(3): 903-916.
- Topic, John R.
1991 Huari and Huamachuco. In W. H. Isbell & G. F. McEwan (eds.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp. 141-164. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*.
- Topic, Theresa Lange & John R. Topic
2010 Contextualizing the Wari-Huamachuco Relationship. In J. Jennings (ed.), *Beyond Wari Walls: Regional Perspectives on Middle Horizon Peru*, pp. 188-212. University of New Mexico Press.
- Uhle, Max
1991[1903] *Pachacamac: A Reprint of the 1903 Edition by Max Uhle* (University Museum Monograph 62). University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania.
1998[1913] Las ruinas de Moche. In P. Kaulicke (ed.), *Max Uhle y el Perú Antiguo*, pp. 205-227. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Watanabe, Shinya
2002 Wari y Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 5 [2001]: 531-541.
2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca (sierra norte del Perú): el caso de la fase Cajamarca Media, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(2): 205-235.
2011 Arquitectura del sitio arqueológico Tantarica, sierra norte del Perú. In K. J. Lane & M. Luján Dávila (eds.), *Arquitectura Prehispánica Tardía: Construcción y Poder en los Andes Centrales*, pp. 67-91. Fondo Editorial de la Universidad Católica Sedes Sapientiae.
2014 Sociopolitical Dynamics and Cultural Continuity in the Peruvian Northern Highlands: A Case Study from Middle Horizon Cajamarca, *Boletín de Arqueología PUCP* 16 [2012]: 105-129.
2019 Dominio provincial wari en el Horizonte Medio: el caso de la sierra norte del Perú, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 230-256.

- Willey, Gordon R.
 1991 Horizontal Integration and Regional Diversity: An Alternating Process in the Rise of Civilization, *American Antiquity* 56(2): 197-215.
- Wright, Henry T. & G. A. Johnson
 1975 Population, Exchange, and Early State Formation in Southwestern Iran, *American Anthropologist* 77: 267-289.
- Zapata Rodríguez, Julinho
 1998 Arquitectura y contextos funerarios wari en Batan Urqu, *Boletín de Arqueología PUCP* 1[1997]: 165-206.
 2019 Unidades territoriales, residencias y tumbas de la elite wari en la región del Cusco, Perú, *Research Papers of the Anthropological Institute* 8: 176-229.
- Zuidema, R. Tom
 1964 *The Ceque System of Cuzco: The Social Organization of the Capital of the Inca*. E. J. Brill.

Capital and Provincial Societies: The Locality of Ancient Andean States

Shinya WATANABE*

In the Central Andes the construction of temples started around 3000 B.C.E. For 3000 years the custom of constructing and renovating temples had continued before the first Andean early state Moche was formed around first century C.E. The Inca Empire developed during the final part of the pre-Hispanic period and founded the provincial administrative centers for provincial rule. Each of these centers had characteristics in common with the capital Cuzco while having its own particularity.

In this article I consider how locality is observed in the provinces of the Inca and Wari Empires. Those who negate centralized one-way dominance from the center and recognize the agency of provincial societies often emphasize original or local characteristics of provinces. However, the local characteristics of the provinces are sometimes left or created intentionally for governance. As locality is a concept used to understand relationality, it is insufficient to set the center against provinces in order to explain it.

Keywords:

Capital, Provincial Rule, Inca, Wari, Ceramics

* Nanzan University